

特31

258

京

都

誌

要

全

025327-000-3

特31-258

京都誌要

山本 顕造/編

M29

ADC-2761



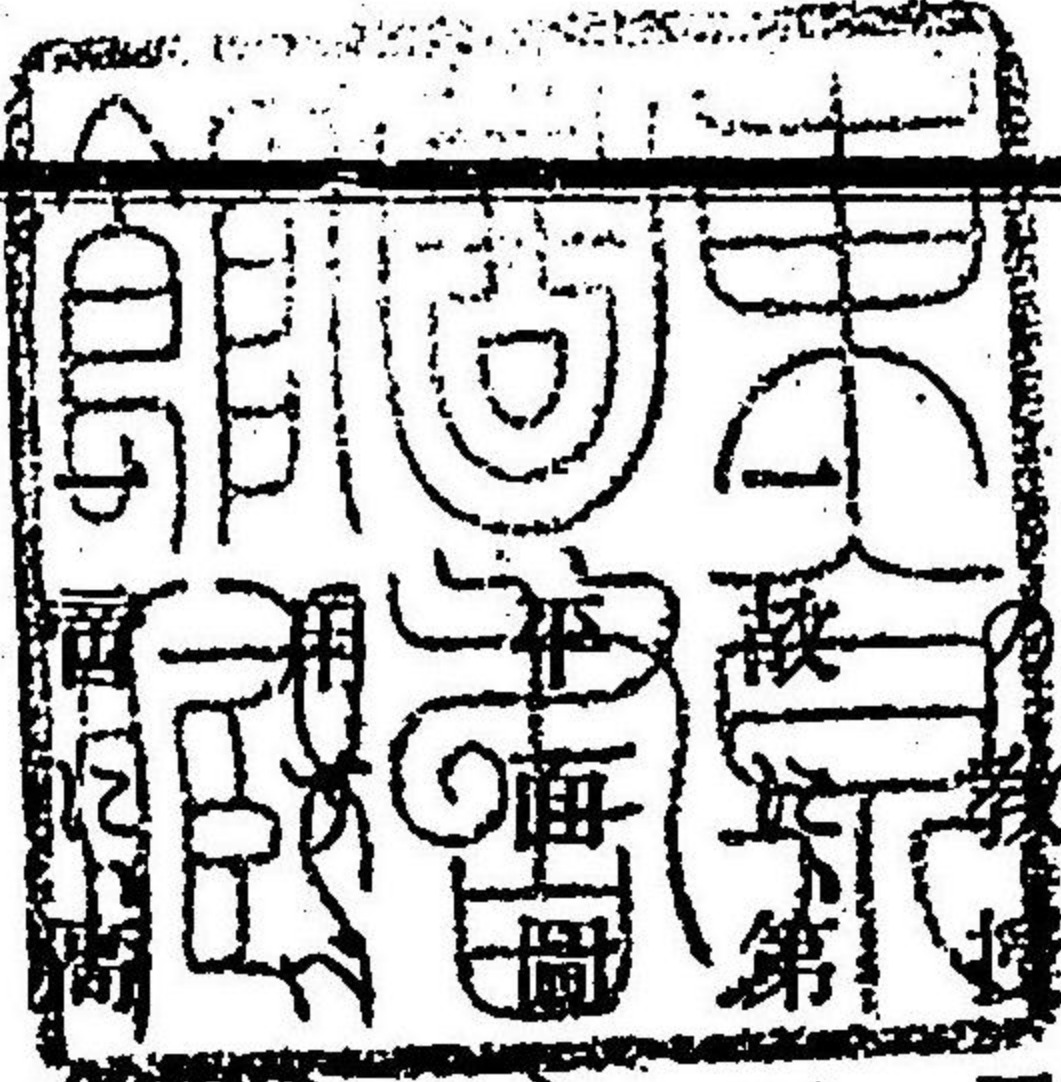
京都誌要

凡例

一此の書は、京都市高等小學校第一學年の郷土地理歴史の教授用に編纂したるものなり。

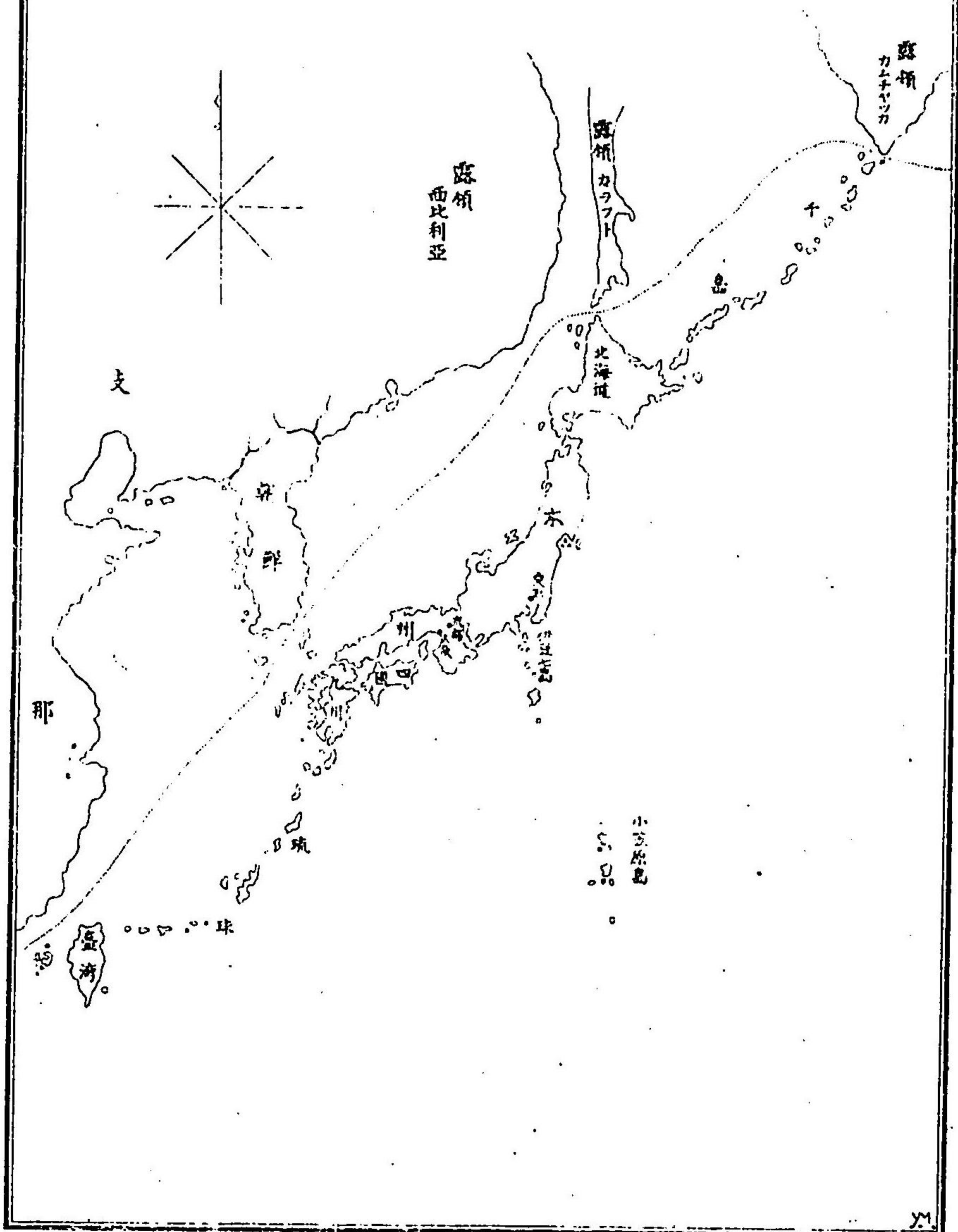
第二章中上京高等小學校を引例せる記事と學校とを換へなば、市内いづれの高等小學校にも通用にも、高等女學校、私立學校の参考用にも適當なるべし。

一最後に附けたる歴史年表には、百年毎の紀元と此の書



大日本全圖

一之分萬十三



にあらえられたる人物、年號等とを記入して、時代の前後
及其の間の年數の大略を知らん爲の便に供せり。

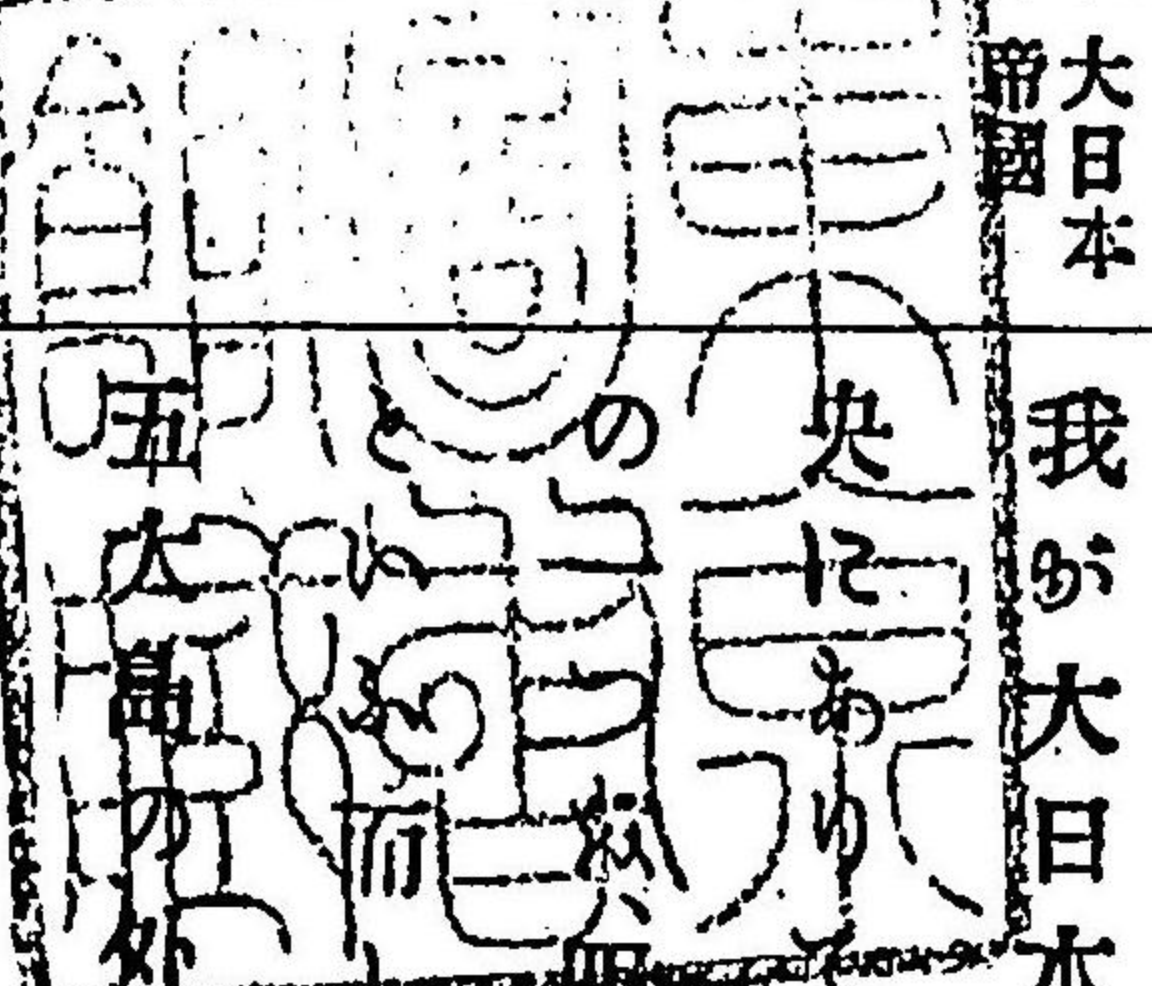
編者識す

大日本公體

京都誌要

山本顯造 編輯

第一。



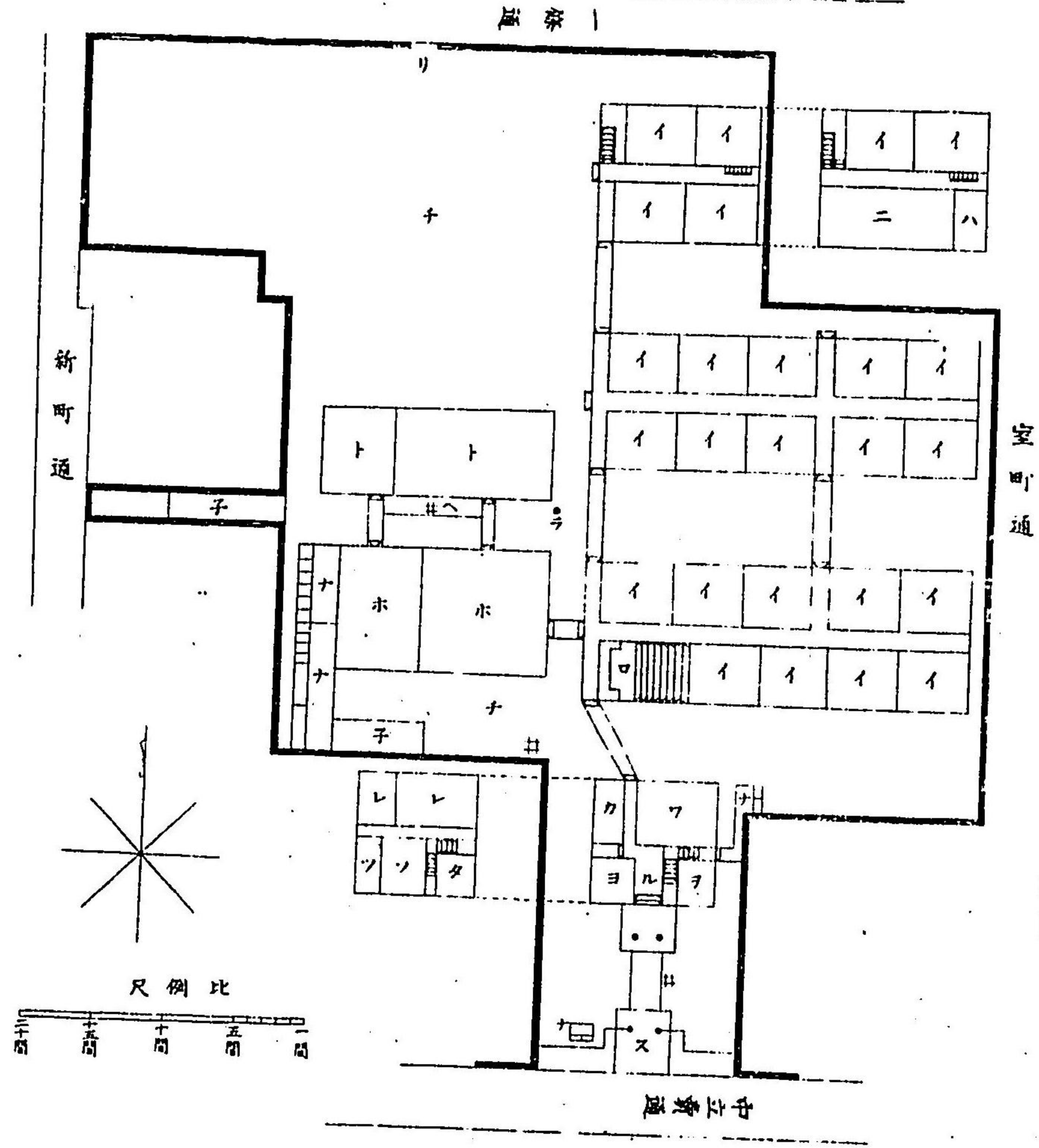
我が大日本帝國は、五つの大島と數多の小島とをり成れり、其の中
央にありて、いち大なる島は、本州といひ、本州の西南にある二大島
の、西國といひ、一つを九州といひ、本州の北にあるを、北海道
といひ、而して、臺灣は、本州の西南遙の海上にありて、支那に近し。
五大島の外には、數多乃小島ありて、千島、琉球、伊豆七嶋、小笠原島等
名高し。我が國全體の形は、恰、龍の、天に登れるが如し。

以上の島々には、山あり河あり、湖沼都會等ありて、東京を、我が國第
一の都會とす。

三府 我が京都は、本州の中ほどにありて、龍の腹にあたり、東京、大阪につ

上京高等小學校敷地校舎

圖之一ノ分千一



イ 教室
ハ 理科室
ニ 裁縫室
ホ 生徒控室
カ 校長室
ワ 教員接見室
ル 應接室
リ 表裏門
チ 遊歩場
ト 食堂
ヘ 湯呑
ホ 衛生室
ニ 裁縫室
ハ 理科室
イ 教室

敷地坪数 三千〇九坪九分
校舎坪数 千〇六十三坪二厘
敷地費 十五百三十四元八角四分
校舎費 四百五十五元十五銭

距離	方針	方角	地圖
距離をはかるには、尺度を用ふべし。六尺が一間にて、六十間が一町	いふ。これによりて、すべての方角を知り得べし。	これ等の方角を、地圖の上に示せるものを、方針ともいひ、磁石ともいふ。	北との中間とて東北ともいふ。 て、西南ともいひ、巽は東と南との中間にて、東南ともいひ、艮は東と北との中間とて東北ともいふ。 北との中間とて東北ともいふ。 これ等の方角を、地圖の上に示せるものを、方針ともいひ、磁石ともいふ。これによりて、すべての方角を知り得べし。
			地圖を見るには、必北を、上にすべし。然れば、下は南にして、右を東、左を西なり。東西南北を、四方といひ、其の中間の方角を、乾坤巽艮といふ。乾を西と北との中間にて、西北ともいひ、坤は西と南との中間にて、西南ともいひ、巽は東と南との中間にて、東南ともいひ、艮は東と北との中間とて東北ともいふ。
			山川、湖沼、都會等の位置をあらわすものと、地圖といふ。さて、地圖なしに、地理を學ばんことは、甚不便なり。
			地圖を見るには、必北を、上にすべし。然れば、下は南にして、右を東、左を西なり。東西南北を、四方といひ、其の中間の方角を、乾坤巽艮といふ。乾を西と北との中間にて、西北ともいひ、坤は西と南との中間にて、西南ともいひ、巽は東と南との中間にて、東南ともいひ、艮は東と北との中間とて東北ともいふ。
			山川、湖沼、都會等の位置をあらわすものと、地圖といふ。さて、地圖なしに、地理を學ばんことは、甚不便なり。
			地圖を見るには、必北を、上にすべし。然れば、下は南にして、右を東、左を西なり。東西南北を、四方といひ、其の中間の方角を、乾坤巽艮といふ。乾を西と北との中間にて、西北ともいひ、坤は西と南との中間にて、西南ともいひ、巽は東と南との中間にて、東南ともいひ、艮は東と北との中間とて東北ともいふ。
			山川、湖沼、都會等の位置をあらわすものと、地圖といふ。さて、地圖なしに、地理を學ばんことは、甚不便なり。

げる大都會にして、この三つを、三府といふ。我が國には、この他、都會なほ多し。



上京高等小學校敷地図
敷地面積 三六町一里
校舎面積 一〇九坪九合一
校舎は南に向ひて、事務室、生徒控所、食堂は、各一棟、物置は二棟、教室

三十六町が一里なり。

面積をえらるには方里として一里四方をもととして算ふべし。京都市の面積、二方里ありといへば、一里四方のものが、二つぶんありといふことなり。一方里より狭きものには、町、段、畝、歩の稱々用ふ。一町は十段、一段は十畝、一畝は三十歩にて、一間四方を、一步または一坪といふなり。この教室の面積は、二十歩ありといへば、一間四方のものが、二十ありといふことなり。

第二。

上京高等小學校は、京都市上京區の中央にありて、南は、中立賣通、北は、一條通、東は、室町通、西は、新町通と接し、面積三千〇〇九坪九合一町。段。畝九歩九分あり。

校舎は、南に向ひて、事務室、生徒控所、食堂は、各一棟、物置は二棟、教室

上京高等小學校

上京高等小學校沿革

は、三棟あり。事務室と北教一棟とを二階建あり。

上京高等小學校は、明治二十年七月一日の創立よりして、初、室町通丸太町上る興文尋常小學校に、假に設け、三つの分教場を置きたりしが、生徒次第に増加し、校舎の狹隘を感ぜしかば、今の地に新築することあり、明治二十四年六月に着手し、翌二十五年五月落成し、同じ六月十二日、聖影拜戴式と新築落成式とを兼ねて、盛なる式を舉行しき。此の校創立の比には、生徒數四百七十名、職員も、僅に七八名なりしが、爾來、年を追ひて、隆盛に赴き、明治二十八年には、生徒千二百名に達し、職員、亦三十餘名の多きに及び、年々、百二十餘名の卒業生を出すに至りて、廣大なる校舎も、もほ狹隘をつげしかば、同年十月、教室一棟の増築に着手し、翌二十九年三月落成しつ。今の北教室一棟、これなり。

學校沿革

我が京都市には、なほ、一つの高等小學校と數多の尋常小學校とあり。其の他、都會にも、村落にも、學校の設ありて、教育の道、十分に開けぬれど、古は、學校と稱するものなく、當時、兒童の學を修めんと欲するものは、寺院の僧侶に就きて、僅に、讀書、習字を學び得るに過ぎざりき。都會の地には、其の後、寺子屋といふもの始まりて、多くの兒童を集め、讀書、習字、算術の類を授けたりき。されど、其の不整頓なることは、實に存外にて、今日、四五十歳以上の人々は、皆、この教育をうけしなり。然るに、明治の聖代に至りて、國民教育の、一日も忽にすべからざるを悟り、明治六年、始て、教育令を布かれてより、到る處も、學校の設あり、殊に、我が京都市の如きは、當時の知事、榎村正直氏の、銳意奨励せられしによりて、學事、大に進歩し、今日の隆盛を、見るに至れり。現今、市内には、小學校の外なほ、數多の學校ありて、兒童も、青年も

普く、學に就くことを得。之を、今より數十年前の狀況にくらぶれば、殆、天地の差あり。これ、偏に、我が 聖天子の御仁政と諸子が父母の恩とによれるなり。諸子、宜しく勵精して、此の二大恩に報はんことを勉むべし。

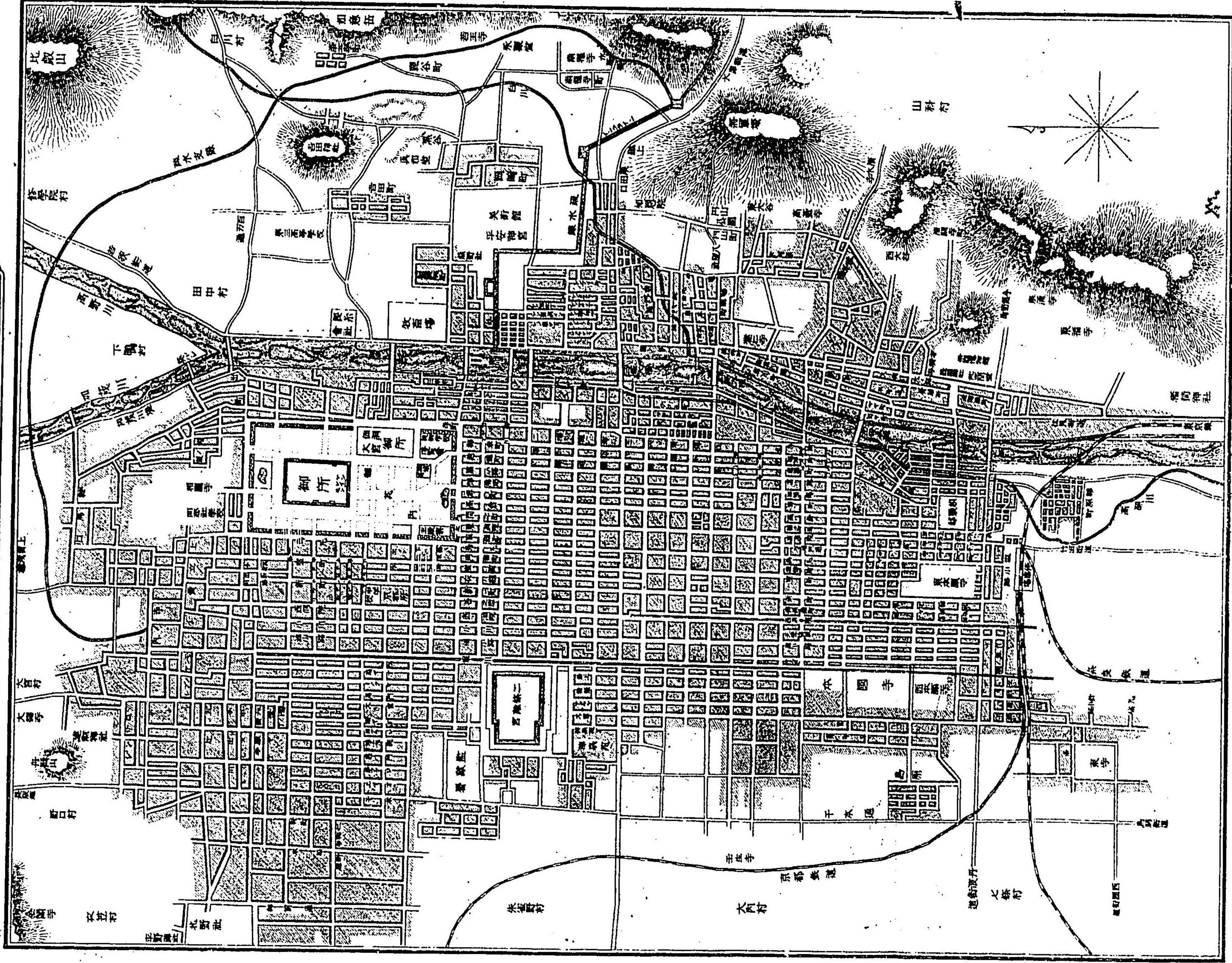
第三。

京都市

京都市は我が國三府の一つにして、山城の中央より、やゝ北に位し。愛宕、葛野二郡の間、在り。東は、東山乃麓に達し、北は、田中村、下鴨村、上賀茂村、大宮村、野口村に、西は、衣笠村、朱雀野村、大内村、七條村に、南は、柳原町に接せり。東西、一里、南北、二里あり。街衢は、端正にして、碁盤の目の如く、家屋は、稠密にして、櫺の齒の如し。山水佳麗にして、空氣も亦清し。神社、佛閣の著名なるもの、名所舊跡の見るべきもの、多きことは、他の都會の及ぶ所にあらず。

京都市金圖

三万六千分之一



加茂川

加茂川は、北方より來り、市の東部を貫きて南流せり。川には、許多の橋梁を架せり。其の出町、荒神口、丸太町、二條、三條、四條、松原、五條、正面七條に架せるは大なるものあり。其の中御幸荒神口に架せるもの三條四條五條四橋を、加茂川の四大橋と稱せり

加茂川より西を、洛中といひ、東を、洛外といふ、洛外を、又、洛東とも、鴨東とも、川東ともいへり。

街衢

街衢の南北に通ぜるものと、縦通といひ、東西に通ぜるものを、横通といふ。三條通は、中央にある横通にして、この通にて、市を、二區に分つ。北を、上京區といひ、南を、下京區といふ。三條大橋の西詰に、京都里程標あり。京都より、諸所に達する里程を、皆、此處より起算するあり。

縦通

縦通の重なるものを、東より記せば、川東に、大和大路、三條より南を繩手といふ仁寺町川より西に、木屋町、二條より五條に至る土手町、丸太町より東川に至り中間河原町、山町より

松原に 寺町、鞍馬口より五條に至る五御幸町、麩屋町、富小路、柳馬場、何れも丸太町より至る。 堀町、丸太町より綾小路に至り、高倉、丸太町より上珠、間之町、丸太町より姉小路に至り、東洞院、丸太町より竹田、車屋町、丸太町より姉小路に至り、又松原より、鳥丸、上立賣より七條、兩替町、街道につゞく。 丸太町より三條に至り、又高辻より、室町、鞍馬口より萬壽寺に至る。 衣棚、三條に至る。 新町、溝藏口より釜座、下立賣より三條に至り、又佛光寺より、西洞院、武者小路より、小川、寺之内より姉小路に至り、又高辻七條に至る。この間を佛具屋町といふ。 堀川、寺之内より萬壽寺に至る。 葎屋町、今出川より、抜と油小路、元誓願寺より八條に至る。 醒井、四條より七條、寺之内より萬壽寺に至る。いふ。 又御池より五條に至る。 猪熊、元誓願寺より竹屋町に至り、又御池より、黒門、今出川一町北より丸太町、此間を岩上といふ。 五條に至る。今出川より北を北猪熊と云。 黒門、今出川一町北より丸太町に至る。此の間を大宮、大宮村より丸太町に至り、松屋町、一條より下長、日暮、一條より竹智恵光新町といふ。 又御池より九條に至る。 寺之内より竹屋町に至り、又御池より、黒門、今出川一町北より丸太町に至る。 浄福寺、寺之内より千本、野口村より京都の西を、七本松、御前通、何れも五院、寺之内より竹屋町に至る。 通じて東寺の西に達す。 立賣に 等あり。又、新京極は、寺町より半町東にて、三條と四條との間の稱なり。

横 通

横通の重なるものど、北より記せば、上京區に、鞍馬口、加茂川堤より、廬山、新町に至る。

寺、大宮より千、寺之内、新町より千、上立賣、鳥丸より千、五辻、大宮より御、今出川、山町より、本に至る。 元誓願寺、小川より御前通に至る。但し、鳥丸より、小川に至り、又大宮より、御、一條、鳥丸より御前通に至り、中、立賣、鳥丸より千、上長者町、本に至る。 中長者町、室町より油、なほ葛野郡につゞく。 出水、鳥丸より新町に至り、又四、下立賣、鳥丸より御前通に至る。 長者町、軒町に至る。 出、水、鳥丸より新町に至り、又四、下立賣、鳥丸より御前通に至る。 鳥丸より日、丸太町、岡崎町より、竹屋町、千本に至る。 夷川、加茂川より、二條、園道より、至る。 押小路、寺町より堀、御池、姉小路、何れも寺町より、三條、東海道筋上より千、本に至る。 あり。又西陣は、一條より北、堀川より西の総稱、聚樂は、二條離宮より、北、一條より南、堀川より西の總稱なり。なほ、川東のみに、仁王門、加茂川より、南、至るあり。

下京區に、六角、蛸薬師、錦小路、何れも新京極より、四條、加茂川東の祇園町より、綾小路、佛光寺、何れも寺町より、高辻、寺町より玉、松原、清水寺より千本を、萬壽寺、寺町より堀、五條、西大谷より、雪踏屋町、高倉より、醍醐屋町の場、何れも東洞院より、六條、下寺町より、大宮に至る。 井に至る。

洞院より西を 萬年寺、下寺町より 上珠敷屋町、下寺町より鳥丸に至る野 正面通、建仁寺 魚棚といふ 鳥丸に至る 下寺町より鳥丸に至る野 下寺町より鳥丸に至る野 中珠敷町といひ東西本願寺の間を御前通といふ 本願寺の間を北小路といふ 七條、建仁寺より千本を経て葛 鹽小路、東洞院より 八條、東洞院より葛 九條、大宮より葛 野郡に入り丹波街道となる 西國街道 等ありて、なほ、川東のみに、古門前、新門前、何れも細手より 等あり。 新市街といふは、川東にあり、吉田町、岡崎町、聖護院町、淨土寺町、鹿谷 町、南禪寺町、以上京區 清閑寺町、今熊野町、以上 上の總稱にして、もと、愛宕 郡に屬せしものかり。

第四。

京都御所は、上京區の東北部に在り。桓武天皇以來、明治維新車駕東 幸までの、皇后にして、紫宸殿、清涼殿などの御建物、いかめしくたち ならび、周圍には、六つの御門あり。東の御門を、建春門、日の御門南のど、 建禮門、南門と 西のど、宜秋門、公家門と 北のど、朔平門といふ。他の二つは、

京都御所

御苑

宜秋門の北にありて、いづれも、臺所御門と稱す。皇居の東南に、仙洞 御所と大宮御所とありて、仙洞御所には、御建物なし。 皇居御築地外は、御苑と稱し、東は寺町、南は丸太町、西は鳥丸、北は今 出川に達す、これ等の町々に接する處には、石壘をさづき、内には、池 を掘り、こゝかしこに、松、柳、梅の類をうゑて、四時の風景、いとよし。 御苑内は、諸人の通行を許され、石壘に、九つの門を設けたり。東のい ち上あるは、石樂師御門、中あるを、清和院御門、下あるは、寺町御門と いひ、南にあるを、堺町御門、西のいち下なるを、下立賣御門、つきなる を、蛤御門、おほつきあるを、中立賣御門、いち上なるを、乾御門といふ。 又、北にあるを、今出川御門といふ。

御苑内には、御所の他、下立賣御門内に、皇族中川宮の御邸、坤隅に、主 殿寮出張所、巽隅に、測候所、博覽會場、美術工藝學校等あり。

二條離宮

二條離宮は、二條堀川の西にあり。徳川氏の建設せしものにして、二條城と稱せりき。明治四年より、京都府廳をここに置きたりしが、同二十七年に至りて、二條離宮と改稱せられ、府廳は、今の處に移りぬ。二條離宮の他、なほ、愛宕郡に、修學院離宮葛野郡に、桂離宮あれど、こは、後に説くべし。

第五。

官 衙 市内にある官衙の重なるものは、

官衙の名	所在地
京都府廳	上京區下立賣通釜座
収 税 部	上京區京都府廳
警察本部	上京區京都府廳内
上長者町警察署	上京區上長者町智恵光院

中立賣警察署	上京區中立賣通烏丸
川端警察署	上京區川端通丸太町
松原警察署	下京區松原建仁寺町
五條警察署	下京區五條橋中島
堀川警察署	下京區堀川通錦小路
京都監獄署	上京區竹屋町通千本
京都市參事會	上京區京都府廳内
上京區役所	上京區中立賣通西洞院
下京區役所	下京區五條通柳馬場
京都地方裁判所	上京區丸太町通柳馬場
京都區裁判所	上京區竹屋町通柳馬場
主殿寮講院寮出張所	上京區御苑内

京都郵便電信局

上京區三條通東河院

今出川郵便電信局

上京區今出川通大宮

五條郵便電信局

下京區五條橋中島

七條電信局

下京區七條停車場内

京都聯隊區司令部

上京區出水通油小路

第四憲兵隊 京都分隊首部

下京區六角通東河院西

大阪大林區京都小林通署

下京區知恩院内

なり。

京都府廳は山城全國あり八郡丹波五郡他の二郡は兵庫縣に屬せり丹後全國五郡と管轄する役所にして、明治十八年、二條離宮より、今の處に移りたるなり。

學校

市内學校の重なるものは、

資格

學

校

名

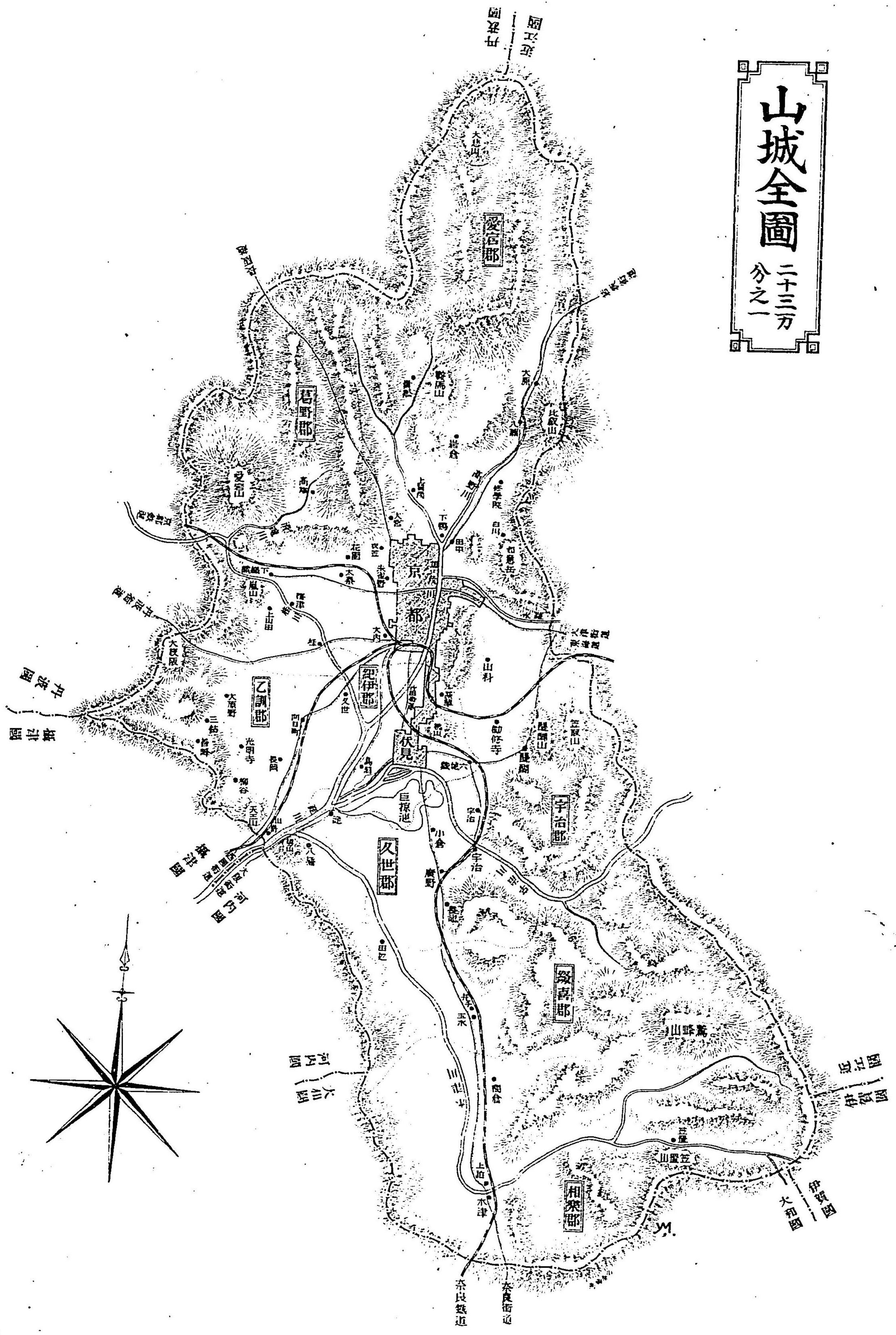
所

在

地

山城全圖

二十三万
分之一



私	立		官立
	市立	公	
同志社學校	下京高等小學校 上京高等小學校	商業學校 醫學學校 高等女學校 尋常中學校 尋常師範學校	第三高等學校
上京區今出川島丸	下京區高辻通室町 上京區中立賣通室町	下京區堀川通蛸藥師 上京區河原町通廣小路 上京區土手町通丸太町 上京區新町通下長者町	上京區寺町通荒神口
	染織學校 美術工藝學校 盲啞院		
	上京區釜座通樵木町 上京區御苑內巽隅		
	上京區釜座通樵木町		

立	平安女學院	上京區下立野通鳥丸
私立	本願寺大教授	下京區大宮通七條
	本願寺文學寮	下京區松原通大宮西
	大谷派中學校	下京區建仁寺町通一ノ橋

病院
 にして、いづれも、數多の生徒を有し、盛に、教育を施せり。
 市内病院は、京都療病院のみ府立にして、其他は、皆私立なり左の如し。

資格	院名	所在地
府立	京都療病院	上京區河原町廣小路
私	京都癲狂院	上京區南禪寺町
	療蟲病院	上京區新町中長者町
	同志社病院	上京區鳥丸上長者町

神社
 市内神社の重なるものは、

立	東山醫院	下京區祇園町
	山田病院	下京區松原通東洞院
	六條病院	下京區新町通御前通

社格	神號	祭	神	所在地
官幣大社	平安神宮	桓武天皇		上京區岡崎町
官幣中社	白峰宮	崇徳天皇	淳仁天皇	上京區今出川小川
	北野神社	菅原道真		上京區御前通今出川
	吉田神社	健甕賀豆賀命 伊波比主命 天之子國根命 比賣大神		上京區吉田町
	八阪神社	素盞雄尊 稻田姫尊の八王子		下京區祇園町
別格 官幣社	護王神社	和氣清麿 和氣脚蟲 路真人豐永 藤原百川		上京區鳥丸下長者町
	梨木神社	三條實萬		上京區寺町廣小路

遷都紀
念祭

桓武天
皇

にして、同じ二十八年三月十五日、神靈鎮座式を行えりき。本殿は、南
面し給ひ、紀念殿大極と、拜殿とし、應天門と、神門とす。紀念殿及應天
門は、いづれも、桓武天皇の平安京御造營の時造り給ひしを模造せ
るにて、紀念殿の左右には、蒼龍、白虎の二樓坂造り、應天門との間に
は、龍尾壇を設けたり。境内には、一面に、淨砂を敷き、綠乃瓦は、朱の柱
と相映じ、光彩燦爛として、さなぬら、延暦の帝都を見る心地す。
明治二十八年は、桓武天皇延暦十三年に、都を、この地に奠め給ひし
より、千百年に當れるを以て、同年十一月、紀念祭を行ひ、世界未曾有
の盛典をあげき。

桓武天皇は、第五十代の天皇にして、光仁天皇の御子なり。延暦元年、
位に、大和國平城に即き給ひ、同じ三年、都を、山背國乙訓郡長岡に遷
し、同じ十三年、更に、この地に遷し給ひて、山背を、山城と改め、都を、平

安京と名づけ給ひき。在位二十四年、御年七十にして崩じ給ひき。紀伊郡深草に葬りて、柏原の陵と稱へ奉れり。

桓武天皇は、勇壯活潑の御君にましまし、其の御在位中、格別に記し奉るべきことは、此の平安遷都の御事と蝦夷征伐との二つなり。

平安遷都

第一代神武天皇以來の皇居は、概、大和國にありて、屢遷移し給ひて、大に不便なりければ、茲に、永久不易の帝都を御造營あらせられんとて、桓武天皇延暦三年、山城國乙訓郡長岡に遷し給ひしと、此地狹くして、大内裏の造營に適せざりしかば、更に、和氣清麿公の勸を用ひ給ひて、葛野郡宇太村に遷し給ひき。これ、即、我が京都にして、其の頃の平安京は、土地、甚廣く、此は、今の一條通より、南は、九條通に至り、又、東は、加茂川より、西は、葛野郡太秦村のあたりまで達したり

きざれば、今の千本通は、其の中央にあたりて、それより東を、左京といひ、西を、右京といひしと、其の後、屢、兵火にかゝりて、終には、今日の如くに、僅に、左京のみを存して、皇居の位置も、東に遷ること、はなかりき。

蝦夷征伐

上古、東海、東山、北陸の諸道に、蝦夷と稱する民あり、王命を用ひざして、つねに、夏民を害しき。歴代の天皇、屢之を征服したまひしかば、次第に、北方に退居せしかど、此頃、なほ、奥羽地方にて、時々、亂を起しければ、此の桓武天皇は、坂上田村麿を、征夷大將軍として、之を伐たしめ給ひしことあり。

坂上田村麿

田村麿は、身の長六尺、面は、熟せる棗の如く、眼は、鷹の如く、鬚は、黄金の針の如くにして、武勇、大に勝れありき。怒るときは、猛獸も怯るれど、笑ふときは、小兒もなつくといふほどの將軍なりき。常々、兵士

を、いたく愛しければ、皆々、身を忘れて、將軍のために、力を盡し、かば、戦に臨みては、向ふ所、敵なく、終には、蝦夷の賊も、遠く、北海道に移り去るに至れりき。今のアイヌ人は、其の蝦夷の子孫なり。將軍の墓は、宇治郡山科村字栗栖野に在り。

社 護王神

磨 和氣清

別格官幣社なる護王神社は、もと、葛野郡高雄山にありしを、明治十九年、今の地に移しまつりしなり。祭神は、和氣清磨公にして、公は、極めて忠誠の人なりき。桓武天皇の、都を、此の地に奠めんとし給ひしとき、みづから、造營使長の任に當りて、遂に、新都を造營せられき。公は、第四十八代稱徳天皇の御時より、朝廷に仕へ奉りしが、其の頃、弓削道鏡といへる僧あり、太政大臣とかり、法王となりて、政を恣にせしが、終には、天位を奪ひまつらんとしけり。天皇は、公に命じ、宇佐八幡宮に詣て、神託をうけしめ給ひき。公、神託をうけてかへり、やが

て、「我が日本ハ、昔ヨリ、萬世一系ノ皇統、連綿トシテ、君臣ノ分限、固ク定マレリ。道鏡ハ、何者ナレバ、勿體ナクモ、非望ヲ抱クゾ。大逆無道ナリ。速ニ誅シ給フベシ。」と奏上せられければ、道鏡は、大に怒りて、公を、大隅に流し遣りき。後、赦されて、京にかへり、平安遷都の功も終へ、年六十七にて薨じ給ひき。此の如く、公は、唯、京都の恩人たるのみならず、實に、國家に、大勳功ありし人なり。

北野神 社

菅原道 眞

其の後、百年を経て、第六十代醍醐天皇の御代に、菅原道真公といへる人あまき。此の人、亦忠義にして、文武に長じ、藤原時平と共に、政を執られしが、時平等の爲めに、讒奏せられて、無實の罪をうけ、筑前に流されて薨せられき。後に至りて、朝廷よりは、正一位大政大臣を贈り給ひ、世の人は、皆、其の徳を尊びて、其の名を呼ばば、菅公、菅家又は天神様といへり。北野神社にまつられ給ふは、即公なり。

白峰宮
保元の
亂

醍醐天皇より大凡二百五十年の後、第七十七代後白河天皇の御代に、保元の亂といふいくさあり、崇徳上皇と後白河天皇との御争なりき源義朝、平清盛等は、後白河天皇より源為義、源為朝等は、崇徳上皇に従ひ奉りぬ。上皇の軍敗れて、上皇は、如意嶽に遁れたまひしが、捕はれて、讃岐に流され給ひ、遂に、其の地にて崩じ給ひき。今上天皇の御父君孝明天皇の御時に至り、上皇在天の御靈を慰めたまはんとて、今出川通小川に、新宮を營み給ひしかど、いまだ、其の祭典を行はせられざして崩じ給ひき。今上天皇の明治元年九月、上皇の神靈を讃岐國よりうつし奉り給ひ、同じ六年に、淳仁天皇の神靈をもあはせ祭りて、官幣中社に列し給ひき。白峰宮と申し奉れるはこれなり。保元乃亂の後、京都にて、平治の亂、木曾義仲の亂ありしが、其の後、平氏、西海に亡びて、源氏の世となりき。北條氏、又、源氏に次ぎて、天下

建勳神
社
織田信
長

を治めたりしが、其の間に承久の亂ありき。後醍醐天皇の御時、北條氏亡びて、足利氏起り、こゝに、南北兩朝の争となりぬ。兩統合一の後、應仁の大亂ありて、京都の大半は、其の兵火にかゝりき。其れより、間もなく、戦國の世となりて、群雄、こゝかしこに峰起せる中に、早や、織田氏の世となり、織田氏亡びて、豊臣氏起り、豊臣氏亡びて、徳川氏かはりき。源平の時代より、明治維新までは、凡、七百年なり。其の間、記すべきこと、甚多けれど、其の詳なることは、後に學ぶべければ、今は、左に、織田信長公と豊臣秀吉公との物語につきて、大畧をしるさん。別格官幣社なる建勳神社は、愛宕郡大宮村の舟岡山にありて、織田信長公を祭れり。公は、和氣清麿公にも劣らぬ忠臣にして、皇室に、功ありしこと、いふばかりなし。

今より三百餘年前の事あり、應仁の大亂には、二十餘萬の軍兵、京都

に集まりて、十一年の間、京都は、戦亂の巷となれりしかば、桓武天皇
以來の帝都は、社も、寺も、人家も、皆焼け失せ、市民は、貴賤となく、老幼
となく、四方に散じて、盡にかける地獄の様となりき、

この大亂をさまりて、間もなく、世は、戦國の時代となりしかば、年々
戦の止むときなく、家を造れば、忽焼かれ、藏を建つれば、忽毀たれな
どして、安らかある日は、一日もなく、終には、力盡きて、また、家を建つ
るものなく、三條より南、千本より西は、全く、野原と變じて、草のみ成
長し、三條より北も、僅に、寺院第宅の、そこ、に淋しく残れるのみ
となりき。

さて、市内のみ、かくあれば、是にはあらざして、皇居までも、實に目
もあてられぬ御有様となれりしなり。皇居の周邊には、御築地もな
く、僅に残れるも、壁落ち、柱倒れて、古寺を見るが如く、三條の橋の上

よりして、内侍所の御燈火を望まれたりしとぞ。又、左近の櫻の傍に
は、茶店を設けて、客を招き、兒童は、紫宸殿に昇りて、御簾の竹を折り
て、遊具に供へ、盜賊は、晝間、白刃を提げて、殿中に侵入する等、申すも
畏れ多き次第なりき。あゝれば、日々の供御にさへ、御缺乏あらせら
れて、御即位の大禮を始め、一切の儀式も行はせられざりし御有様
なりき。さうと、正親町天皇の御代に至り、公、尾張より、京都に上り、勅
を奉じて、京畿を平定し、かの荒れたる皇居を修理し、御所の御賄料、
御儀式の費をも獻じて、舊典を興し、天下安んじて、皇室の尊きことを
知らしめき。又、道路を修め、橋を架けなどして、大に、京都の民をも恤
みければ、皇室の光は、丁度、日中に、陰雲の晴れしが如くに輝き、人民
は、始めて、生きたる心地し、安んじて、業に就くを得たり。かくれば、京
都は、また次第に、昔の様よかへり行きぬ。公は、かくの如く大功あり

しかば、明治の初年に、朝廷より、太政大臣従一位を贈り、神號をば、建勳と給ひ、明治十一年に、其の祠を、舟岡山に造營せられたりき。かくて猶、公の大業は、未だ完からぬ、逆臣明智光秀に、本能寺にて弑せられたまひき。口惜しき限なり。されど、公の志を繼ぎて、其の大業を成就せし人あり。そを、豊國神社と祀られたまへる豊臣秀吉公、これなり。

豊國神社
豊臣秀吉

秀吉公は、尾張國愛智郡中村の百姓の子にして、幼名を、日吉丸といひき。二十歳の頃、織田信長公に仕へて、公の草履取とされりしが、後、大に用ひられて、屢、軍功ありき。かくれば、終に、中國征伐の大將に任ぜられて、毛利氏を征伐しけるが、たましく、信長公弑せられ給ひぬと聞きて、直にかへり、光秀と、乙訓郡の山崎に戦ひて、之を誅し、やがて、天下を一統しげり。これより、更に、京都の市街をよきめ、大に、皇居

造營し、諸種の工藝を奨励して、全く、古のまゝの京都に復したまひき。公も、かくの如く大功ありしかば、朝廷より、豊國の神號を給ひ、明治六年、別格官幣社に列せられ、尋ぎて、今の地に、祠を建て、祀られたまふことゝなれり。

上京區の聚樂といへる處は、公の邸宅のありし跡にて、伏見乃桃山は、公の築きたまひし城趾なり。公の墓を、豊國神社の後なる阿彌陀峰にあり。京の大佛を造り、大阪城を築き、朝鮮を征伐し給ひしなどは、皆、公の事業にして、此れ等の面白き話は、後、歴史を學ぶときを待つべし。

梨木神社
三條實萬
八阪神社

明治維新の頃、皇室に、功ありて、京都に祀られ給ふは、故の内大臣三條實美公の父君三條實萬公にして、別格官幣社梨木神社これなり。八阪神社には、天照皇太神の御弟素盞雄尊、上下御靈神社には、桓武

上下御
靈神社

天皇の皇弟早良親王、崇道天皇のこと同皇子伊豫親王、同夫人藤原吉子、外五人をまつれり。其の他の神社より、神代の神々を祀れり。

祭禮

京都の祭禮は、概、右の神々の御祭にて、平安神宮は、十月二十二日、北野神社は、十月四日、八阪神社は、七月十七日と二十四日と、上下御靈神社は、五月十八日、今宮神社愛宕郡大宮村にあり、五月十五日、稻荷神社紀伊郡深草村にあり、五月第一の卯の日より行ふ。中にも、八阪神社の祭禮は、祇園會と稱し、山鉦、あまたいで、最賑し。平安神宮の祭禮も、時代祭と稱し、桓武天皇以後の時代行列ありて、甚珍しく、こは、明治二十八年十月に、始めて行ひき。葵祭といふは、毎年五月十五日、朝廷より行はせらる、祭禮もて、行列、最うるはしく、勅使、宜秋門よりいで、愛宕郡上下賀茂の大社に参向す。この祭禮も、實に、天下一の祭禮にて、祭といへば、必、葵祭のこと、定まれるほどのものなり。

第六。

佛閣

市内にある佛閣の重なるものは、

宗旨	寺	號	開山	若クハ 創建者	所在地	
眞	眞	眞	戒	策	上人	上京區吉田町
天	青	蓮	傳	教	大師	下京區三條通白川橋の東
方	廣	寺	豐	臣	秀吉	下京區建仁寺町正面 <small>大佛といふ</small>
頂	法	寺	見	眞	大師	下京區六角通烏丸 <small>六角堂といふ</small>
眞	泉	涌	弘	法	大師	下京區今熊野町
教	王	護	弘	法	大師	下京區大宮通八條 <small>東寺といふ</small>
六	波	羅	空	也	上人	下京區松原通大和大路東 <small>西國三十三所の一</small>
知	積	院	興	教	大師	下京區大佛妙法院の南

眞相兼眞言						眞相兼眞言					
清 水 寺 延 鎮 禪 師						清 水 寺 延 鎮 禪 師					
下京區松原通東端						下京區松原通東端					
本派本願寺 見眞大師 下京區堀川花屋町 <small>西本願寺 ともじふ</small> 大谷派本願寺 教如上人 下京區烏丸七條 <small>東本願寺 ともじふ</small> 佛 光 寺 了源上人 下京區佛光寺高倉 興 正 寺 了源上人 下京區本派本願寺の南 東 大 谷 下京區東山圓山町 西 大 谷 下京區五條通東端						相 國 寺 夢想國師 上京區今出川烏丸東 慈 照 寺 夢想國師 上京區淨土寺町 <small>銀閣寺 ともじふ</small> 南 禪 寺 大明國師 上京區南禪寺町 建 仁 寺 葉上僧正 下京區建仁寺町四條南 高 臺 寺 月庵禪師 下京區下河原南 東 福 寺 聖一國師 下京區本町十五町目					
眞 眞						眞 眞					
法 華						淨 土					
立 本 寺 日像上人 上京區七本松一條 妙 顯 寺 日像上人 上京區小川頭 本 滿 寺 日秀上人 上京區寺町今出川北 妙 滿 寺 日計上人 上京區寺町二條 本 能 寺 日隆上人 上京區寺町姉小路						金戒光明寺 圓光大師 上京區岡崎町 永 觀 堂 眞紹僧都 上京區南禪寺町 檀王法林寺 道光法師 上京區三條大橋東詰 知 恩 院 法然上人 下京區圓山公園の北 誓 願 寺 惠隱僧都 下京區新京極六角 大 雲 院 貞安上人 下京區寺町四條南					

頂妙寺	日祝上人	上京區仁王門川端
本國寺	日靜上人	下京區松原堀川
念佛堂	空也	空也上人
律法然院	法然上人	上京區鹿谷町
時御影堂	弘法大師	下京區五條寺町西

大佛 等にして、方廣寺は、俗に、大佛といふ。秀吉公の建てられし寺にて、長六丈三尺の大佛ありしが、地震にて崩れたりき。後に、屢、再建せしが一たびは、失火に遇ひ、一たびは、地震に遇ひ、又一たびは、雷火のためよやけて、最後に造らんとして、やうく、半體のみ成りしが、今存せるなり。此の寺の鐘は、甚大にして、知恩院の鐘と共に名高し。寺の前なる耳塚には、秀吉公、朝鮮征伐の時、敵の首を獲ることによりてもちかへりし耳塚埋めたるなりとぞ。

泉涌寺

泉涌寺には、第八十七代四條天皇以後御歴代の御陵あり。高臺寺よりは、秀吉公の像を安置せり。寺の東は靈山にして、招魂場あり。維新前、國事に奔走せし人々の靈をまつるがために、祠をたて、毎年春秋兩度に、祭を行へり。京都午砲は、此の招魂場の傍にあり。

銀閣寺

慈照寺を、銀閣寺ともいふ。如意嶽の麓にあり。足利八代將軍義政、此の處に、二階の高閣を築き、庭園を設けて隱居し、閣に、銀はりて、北山の金閣に比せんとせしが、まだ、全く成らざして死しぬ。よりて寺とせしなり。

相國寺

相國寺は、御所の北にありて、應仁の亂には、此の寺、大戦場となれりき。此の亂は、山名宗全と細川勝元との戦にて、勝元は、此の寺のあゑりに陣取し、宗全は、今の西陣に陣取せりき。西陣といふ名は、此れより起りしなり。

本願寺は有名なる寺にして、堂宇壯大なり。信徒、頗多くして、參詣者常にたゞぞ。

東 寺

弘法大
師

教王護國寺と、東寺ともいふは、大谷派本願寺と、東本願寺、本派本願寺と、西本願寺といふが如く、昔、此の寺の西に、大寺ありて、これ、西寺といひしが故なり。東寺の開山弘法大師は、讃岐の人にして、空海といひし人あり。支那に渡りて、學問を修め、かへりて、法を弘め、高野山にて死しき。文字、彫刻に巧にして、いろは、四十七字の歌は、此の人の作なりといふ

六波羅
密寺

清水寺
草堂

六波羅密寺、清水寺、草堂の三つは西國三十三番の札所にして、參詣者多し。

第 七。

會 社

市内會社、銀行等の重なるものは、

營業目		社 名	所 在 地
織物	京都織物會社 西陣紋織會社	京都織物會社 西陣紋織會社	上京區川端通御幸橋東詰 上京區智恵光院寺之内下る
製絲	日本製絲株式會社 絹絲紡績會社 京都製絲會社	日本製絲株式會社 絹絲紡績會社 京都製絲會社	上京區小川通上立賣南 上京區聖護院町 上京區川端通御幸橋北
活版	合資商報會社	合資商報會社	上京區三條通東洞院東
時計	時計製造會社	時計製造會社	上京區富小路通二條北
烟草	合名會社村井兄弟商會	合名會社村井兄弟商會	下京區馬町通大和大路東
	第四十九國立銀行 第一百十一國立銀行 京都商工銀行	第四十九國立銀行 第一百十一國立銀行 京都商工銀行	下京區三條通柳馬場西 下京區三條通東洞院西 下京區東洞院通六角南

銀行		取引	貿易
京都銀行	下京區松原通烏丸東	京都株式取引所	佛敎生命保險會社
京都貿易銀行	下京區寺町通四條南	京都米穀取引所	
西陣銀行	上京區元誓願寺通大宮西	京都油取引所	
京都貯蓄銀行	下京區三條通東洞院西		
鳴東銀行	下京區建仁寺町通四條南		
日本銀行京都出張所	上京區東洞院通御池北		
三井銀行支店	下京區新町通六角南		

保險	電氣	新聞	運送
有隣生命保險會社	京都電燈會社	日出新聞社	內國通運會社京都支店
京都生命保險會社	京都電氣鐵道會社		丸阪合資會社
			菊岡合資會社支店
			疏水運送會社

京都博覽會

等にして、いづれも、盛に營業せり。
 京都博覽會も、會社の一つにして、御苑内よりあり。年々、新古の美術工
 藝品を陳列して縦覽せしむ。

美術館

平安神宮の東にある美術館は、明治二十八年に開かれし第四回内國勸業大博覧會の美術館にして、時々、美術品を陳列して、博覧會と同じく縦覽せしむ。

帝國博
物館

大佛、豊國神社の南、三十三間堂の北ある帝國博物館は、明治二十九年に出來しぬ。此處には、美術工藝品は勿論、社寺の寶物、博物標本等を陳列して、常に縦覽せしむ。

これ等は、すべて、世間に利益あるものゝみにして、大に、知識を得べきものなれば、暇あらば、行きて見るべく、見なば、必、新しき知識を得て、世の利益ともなるべきことを計り考ふべし。

第八。

京都の
戸數人
口成業

京都の戸數は、凡七萬にして、人口は、三十五萬あり。市民は、氣風温雅にして、美術工藝の術に秀でたれば、従ひて、商業よりも、工業の方盛

にして、多く、重要なる産物を製出す。

産物

京都産物の重なるものは、西陣織物、鹿子縷、刺繡、絲組物、染物、粟田焼陶器、清水焼陶器、磁器、銅器、七寶焼、漆器、扇子、團扇、翫弄品、金銀箔等にして、いづれも、一種の特質を有し、其の名、内外に高し。

名所

京都は、かくの如く、重要な美術工藝品を製作するのみならず、四周、皆、山秀で、水清くして、有名なる神社、佛閣、名所、舊蹟等、數多あり。到處皆、庭園の如く、其の名、東西に聞こゆたり。されば、四方より來りて見物するもの、甚多く、又、外國人の來遊する者も少からざ。

東山は、北如意嶽より、南稻荷山までの總稱にして、前には、加茂川の清水をひかへ、麓には、銀閣寺、眞如堂、黒谷、鹿ヶ谷、若王寺、永觀堂、南禪寺、平安神宮、知恩院、圓山公園、八阪神社、高臺寺、清水寺、西大谷、大佛東福寺、稻荷神社等ありて、四時の風景、甚よし。

圓山公園は、華頂山の麓にありて、知恩院、八阪神社にちかし、風光明媚にして、花月觀雪の景、皆よし。中にも、圓山の雪景色、祇園の絲垂櫻、吉水温泉等は、人のよく知れる所なり。

如意嶽には、毎年八月十六日、大文字として、大の字の火を點じ、加茂川にえ、夏毎に、河原すゞみありて、いと盛なり。河上乃涼棚に、晝間の熱さを忘る。

氣候

京都の氣候も、温和なれども、夏も暑酷しく、冬は風寒くして冷は甚し。

第九

交通

京都には、鐵道あり、電氣鐵道あり、疏水運河あり、高瀬川あり、諸國に達する平坦なる道路あり。疏水運河、高瀬川は、淀川に通じて、運輸交通、甚便なり。

鐵道

鐵道は東西に通ぜり、官設のものに南北に通ぜり、私設のものもあり。烏丸の南なる七條停車場より、東に向ふものは、稻荷、山科の二停車場を過ぎて、近江國に入り、大津を経て、終に東京に達せり、西に向ふものは、向日町、山崎の二停車場を過ぎて、攝津國に入り、大阪、神戸を経て、山陽鐵道と連絡し、終に、廣島に達せり、南に向ふものは、奈良鐵道と稱し、伏見、宇治、玉水、木津を経て、大和國奈良に達せり。又、京都鐵道と稱して、北に向ふものは、京都の西を過ぎ、嵯峨を通り、丹波に入りて、終に、丹後舞鶴、宮津に達するものあれど、この鐵道は、いまだ出來せざ。

疏水運河

疏水運河は、近江琵琶湖の水を引けるものにて、山には、トンネルを穿ち、坂には、インクライン、坂設けて、舟を通じ、運漕、大に便なり。疏水本線の流は、夷川通に至りて、加茂川に入り、川の東岸に沿ひて、南に

流れ、七條の南にて、分れて伏見に入り、終に淀川に達せり。支線は蹴
上げより分れて、南禪寺の後を通り、若王寺、銀閣寺の前を流れて、愛
宕郡に入り、高野、加茂兩川の底をくゞりて、西に行き、終に小川に入
る。小川は一條にて、堀川と合ひ、京都の西部を貫流して、終に、加茂川
に入る。

疏水運河は、明治十八年八月、工事に着手し、同じ二十七年八月、全く
竣功しき。其の頃の知事北垣國道氏の計畫せしものなり、この運河
の出来てより、運漕の便を起こし、のみならず、田畑の灌漑、水車の
運轉及電氣を起こして、人力、蒸氣力に代ふる等、其の用勘からず。電
氣車は、この電氣を用ひて運轉せるものなり。電氣は、其の他、おほ、電
燈、織物、撚絲、紡績、時計、ラム子等の製造所にも利用せり。

電氣鐵道

京都電氣鐵道は、我が國最初の電氣鐵道にして、市内を通じて、南伏

見に到れり。交通、最便なり。

高瀬川

高瀬川は、今より、三百年前に、角倉了意といふ人のひらきし川にて、
木屋町二條より、伏見淀川に至れり。荷物の運送、甚盛なり。

疏水運河も、高瀬川も、伏見にて、淀川に入る、淀川には、和船及蒸氣船
ありて、絶へざ、大阪との間を往來せり。

道路

京都より、諸國に達する道路は、甚多し。三條通の東蹴上げより、大津
に達する街道を、大津街道といふ。此の街道は、東海道とも稱す、東京
まで百三十里の間、五十三の宿驛を通りて、往來せし街道なれど、蒸
車通じてより、大に淋しくなれり。

若狹街道といふは、加茂川の上流なる高野川に沿ひて、北に向ひ、比
叡山の麓を通りて、近江に入り、若狹に達する街道なり。京都の西千
本通を、北に取りて、丹波に達する街道を、長阪越といふ、この二つの

街道は概、山間にあり。僅、車を通ずれど、往來いと少し。
 丹波街道も、七條通を、西に行き、桂川を渡り、大枝阪を越へて、丹波龜岡に達する街道をいふ。この街道も、山多けれど、道よければ、往來多くして、馬車も通ぜり。
 西國街道と大阪街道とをいづれも、攝津に至る街道にて。西國街道は、東寺の南より、西に向ひ、向日町、山崎を過ぎて、攝津に入り、大坂乃北を通りて、おほ、西國に達せり。大阪街道は京都より、伏見を経て、淀八幡を過ぎ、淀川の南へ通りて、大阪に入る。
 奈良街道といふも、京都より、伏見に入り、伏見より、巨棕堤を、經廣野、長池、玉水、木津等を過ぎて、大和の奈良に達する街道あり。京都より、伏見へ行くには、伏見街道と竹田街道との二つあり。伏見より、宇治堤を行けば、宇治に入りて、廣野に達するを得るあり。

第十。

京都市の地理及歴史は、あらかた説きつれば、これより、市街近接の地并に山城各郡部の概略をとかん。

山城八郡

山城にも、八郡あり。愛宕、葛野、乙訓、紀伊、宇治、久世、綴喜、相樂、これなり。愛宕以下五郡は、淀川の北にありて、久世以下三郡は、淀川の南にあり。

郡役所

市、市長、區に、區長あるが如く、郡には、郡長ありて、其の郡を支配し、其の役所を、郡役所といふ。郡役所の位置、左の如し。

郡役所	所在地
愛宕郡役所	田中村
葛野郡役所	太秦村
乙訓郡役所	向日町

紀伊郡役所

伏見町

宇治郡役所

醍醐村

久世郡役所

淀町

綴喜郡役所

田邊村

相樂郡役所

木津町

市、町、

右郡役所々在乃町村は、大抵、その郡中の最繁華ある地にして、町は、村より、人口多く、市は、また、町より、人口多し。山城よは、町と村とは、數多あれど、市は、唯、京都市一つなり。

名邑

郡中、なほ、他の名邑とあぐれば、愛宕に、白川、修學院、岩倉、上賀茂、下鴨、葛野に、衣笠、嵯峨、梅津、桂、乙訓に、久世、山崎、紀伊に、深草、鳥羽、宇治に、山科、宇治、久世に、宇治、長池、綴喜に、八幡、井手、相樂に、上狛、笠置等あり。京都市にて、山といふは、東山の外に、なけれど、郡には、大小の山少か

山

河

らず。市の北に、比叡山、鞍馬山あり。西に、愛宕山あり、南に、鷲峰山あり、東に、醍醐山、笠取山等あり。この他、大なるにはあらぬど、名の聞こはたるものも、舟岡山、高雄山、嵐山、天王山、笠置山、宇治山等あり。山城の周圍は、これ等の山々以て圍まれたり。

次は、河流は、比叡山の麓より流るゝ高野川と鞍馬山より流るゝ加茂川とは、市の東北出町にて合ひて、加茂川とあり、市の東部を貫流して、桂川に入る、桂川を、丹波より來りて、嵐山の麓を流れ、加茂川と、一つになりて、淀川に入る。木津川は、山城の東南隅より流れ來り、八幡に到りて、淀川に入る、淀川の上流は、宇治川といひて、源を、近江の琵琶湖より發せり。伏見に來りて、淀川とありて、疏水運河、高瀬川の水をうけ、更に、桂川、木津川を合はせて、攝津に入り、大坂市内を流れて、海に入る。

さて、右諸山よりは、多くの材木或は薪炭を出だし、又、河水は、何れも田畑の灌漑或は舟筏交通の便利あり。有名なる神社、佛閣は、其の間に散在して、山水の風景、皆佳なり。名所、舊跡の多きこと、實に我が國に冠たり。東山近邊は、既に説きたれば、左に、これ等郡部の社寺、名勝地及歴史の大要をとらん。

愛宕郡

愛宕郡は、比叡鞍馬の二山あり

比叡山は、山城、近江の二國に跨れる大山にして、樹木なく、其の形富士に似たれば、世に、都富士と稱せり、空氣清く、風涼しければ、近年は避暑のため登山するもの多し。山に、寺あり、延暦寺といふ。滋賀縣の管轄なり。此の寺は、桓武天皇の延暦年間、僧最澄のたてし所にし。て、天台宗あり。堂塔、數多ありて、歴朝の御尊信淺からず。昔は、三千坊とて、坊の數三千ありしが、織田信長公のために焼かれて、今は、存する

もの、甚少し。

信長公の、此の寺を燒きしより、猶六百餘年前に、平將門、藤原純友といふものありき。此の山に上り、王城を見下して、不軌をはかりしことあり。又、後醍醐天皇の御時、護良親王、此の寺の座主となり給ひき。天皇も、亦、此の寺に幸し給ひしことあり。山の麓なる若狹街道に沿ひて、八瀬、大原の二村あり。名勝多し。平治の乱に、源義朝の遁れて、近江にいてしは、此の道なり。

鞍馬山は、京都市の正北にあり。此の山にも、寺あり、鞍馬寺といふ。天台宗あり。源義經、幼少の頃、此の山にこもりて、劍法を學びしことあり。昔より、此の山にも、比叡山にも、愛宕山にも、天狗といふもののみて、義經に、劍法を教へしなどいへど、今は、疑なきそらごととなりと知るべし。此の山の麓に、貴船神社あり。官幣中社あり。

修學院村には、修學院離宮あり、御茶屋と稱す。上、中、下の三つありて上の御茶屋、いち廣く、園池の景、甚佳あり。

上賀茂、下鴨に、各、官幣大社あり。祭神、左の如し。

上賀茂 賀茂別雷神社 賀茂別雷神

下鴨 加茂御祖神社 火雷神 玉依姫

いづれも、境内、清砂を敷き、大木、あまた茂りて。いと尊し。葵祭は、即、此の両社の祭禮なり。

船岡山は、大宮村にありて、京都の西北に近し。山に、建勳神社あり。山は、極めて低けれど、梅林ありて見はらしよし。來り遊ぶもの多し。船岡山の北に、巨剎あり、大徳寺といふ。禪宗なり。此の寺と田中村の知恩寺とは有名なる寺にして、知恩寺は、世に、百萬遍と稱す。淨土宗あり。

葛野郡

愛宕郡の産物には、白川石、鞍馬炭、北山丸太等あり。

葛野郡には、愛宕山あり。比叡山と相對せる山城第一の高山なり。其のいたゞきに、愛宕神社をまつりて、府社なり。麓より五十町の阪路には、一町毎に、茶店ありて、見はらしよく。清瀧川、山のすそを流れて、水、甚清し。

愛宕山の東に、高雄山あり。もと、護王神社のありし處にて、紅葉の名所なり。南に、嵐山あり、櫻に名高し。嵐山の麓を流るゝ川を、大堰川といふ。上流を、保津川といひ、下流を、桂川と稱す。保津川は、丹波より來り、嵐山の麓まで山間三里の間、奇岩、相連りて、水流、極めて早く、風景甚よし。此の川も、かの角倉了意の開きしにて、もとは、僅に、溪流の通ざるのみなりしが、其れより、舟も、筏も、自由に通ざるに至れり。丹波より、京都に運送する材木類は、皆、この川を流し來り、嵯峨村より、西

高瀬川によりて、終に千本通三條に達するあり。

嵐山は、山水の景をとてなへ、櫻花の満開、最も美しく、秋の紅葉、冬の雪、また皆佳なり。この山の東よ、法輪寺といへる寺あり、虚空藏菩薩をまつれり。都俗、十三まありとて、兒女、十三歳になれば、虚空藏の智慧を授からんと、美麗なる衣服を着飾りて参詣するもの多し。

嵐山と愛宕山との間は、いにしへ、嵯峨野と稱せし處なり。名所、舊跡、實に夥しく、小楠公首塚、新田義貞首塚、定家卿小倉山の古跡、野々宮等皆、この間にあり。大覺寺、清涼寺、釋迦堂といふ天龍寺も、また、此處にあり。大覺寺は、眞言宗、清涼寺、淨土宗、天龍寺は禪宗なり。

此の郡には、名の聞こひたる寺、なほ六つあり、金閣寺、禪等持院、禪仁和寺、眞言妙心寺、廣隆寺、眞言壬生寺、眞言これなり。

金閣寺は、衣笠村にあり。足利三代將軍義滿の閑居せし處にして、三

層の金閣、閑雅なる庭園、共に、天下に名高し。等持院も、衣笠村にあり。足利將軍歴世の木像を安置せり。仁和寺は、花園村にあり。世に御室といふ。境内、櫻多し。妙心寺も、花園村にあり。寶物多し。廣隆寺は、太秦村にあり。千三百年前の創立にして、平安第一の古刹なり。大工の信向深し。此の寺の祭禮牛祭十月十日は、世に名高し。壬生寺は、大内村にあり。毎年四月行ふ所の大念佛は、世に、壬生狂言と稱して、來り觀るもの多し。

桂離宮は、下桂村にあり。豊臣秀吉公の建築せしものにて、庭園の景、修學院に劣らず。

此の郡には、官幣大社二つあり。左の如し。

- 松尾神社 大山咋命外一神 上山田村
- 平野神社 今水神外三神 衣笠村

松尾神社は、世の、造酒の神と稱して、酒造者の信向厚く、平野神社境内の夜櫻は、都人の、最愛賞する所あり。

官幣中社なる梅宮は、梅津村にあり。この神も、酒造者の信向厚し。社の西なる桂川のほとりに、梅津製紙場あり。盛に、西洋紙を製造せり。葛野郡の産物には、松茸、筍、菜、砥石、紙等あり。

乙訓郡

乙訓郡は、葛野郡の南にありて、天王山、その西南隅に聳えぬ。此の山の頂上に上れば、左に、京都、右に、大阪を見るべく、景甚よし。山の麓よ、山崎村ありて、此のあたりは、豊臣秀吉公と明智光秀と戦ひし處なり。

桓武天皇長岡の都趾は、向日町字鶏冠井にありて、しるしの石碑建てり。

長岡天満宮は、乙訓村にあり。境内、池あり。池邊には、梅、躑躅、紅葉等を

植ゑたり。來り遊ぶ人多し。

此の郡には、官幣大社なし。唯一つの中社あり。大原野神社と號す。寺には、粟生光明寺、淨土善峰寺、天台三鈷寺、天台楊谷寺、淨土等あり。楊谷の觀音は、眼病にしるしありとて、參詣する者多し。

此の郡には、著しき産物なし。

紀伊郡

紀伊郡は、京都の南にありて、山城の中央にあたり。

伏見町は、伏見街道にて、京都市に連絡し、戸數、四千、人口、二萬あり。此の地は、深草野と稱して、草のみ茂れる野原なりしが、豊臣秀吉公、城を、桃山に築きてより、漸次、繁盛に赴きぬ。又、此の地は、水利の便ありて、大阪と交通の要路に當れるを以て、遂に、大に繁昌せり。然るに、瀛車通じてより、一時衰へたる有様なりしが、近頃、疏水運河の開通、電氣鉄道、奈良鉄道の布設ありてより、漸くまた、昔のさまにかへ

らんとせり。

町の東なる小山を、桃山と稱す。桃山城のありし處なり。朝鮮の役、秀吉公、此の城にて、明國の使節を延見し、公薨去の後、徳川家康、此の城にありて、政をとれりしか、後遂に、これとこぼちて、今は、全く畑地とされり。世に、これを、桃山千疊敷と稱せり。此の處、景甚よく、京都、山崎、八幡、淀、巨椋池、宇治川より、遙に、南山城を見渡すべし。春花の候、梅、桃、爛熳として、遊人、甚多し。奈良、鎌道、桃山停車場は、此の山の麓にあり。

伏見分營は、伏見町にありて、工兵一隊を置きり。分營の北に、御香宮神社あり。境内に、此の地の義民文珠九功の碑を建てたり。

此の郡には、有名なる官幣大社一つあり。左の如し。

稻荷神社

倉稻魂命

外四座

深草村

參詣人の多きこと、山城第一にして、二月初午は、特に夥しく、境内も、街道も、皆、人眾以て充滿し、立錐の地もなきばかりなり。社より北の街道には、伏見人形を賣る店多し。

稻荷神社の南、墨染の北に、藤森神社あり。府社なり。毎年六月五日、撰甲騎馬の祭禮ありて、甚珍らし。

疏水運河は、稻荷神社の前を流れ、墨染にて、再、インクラインと成り、伏見の町を貫きて、淀川に入る。淀川には、和船及川蒸氣ありて、絶えず、大阪との間、往復せり。

明治元年正月三日、伏見、鳥羽の戦は、此の町より、西鳥羽、淀、八幡、山崎の地方にわたりてありしなり。徳川慶喜、大阪より、兵隊率ゐて上京せしを、朝廷、有栖川宮よ、錦旗を授け、征伐し給ひしなり。かの「宮サン」官サンに馬の前にもらくするのは何んじやいかア、ハ朝敵征伐

せよとの錦のみはたと知らぬいは、此の時のこととうたひえ歌なり。

紀伊郡の産物には、伏見人形、瓦、慈姑等ありて、淀川よりは、鯉、其の他の川魚を産す。

宇治郡

宇治郡は、紀伊郡の東に在り。北には、東海道、疏水運河あり。中央には、鉄道あり。又、南にも、宇治川あり。更に、伏見より、大津に達する街道ありて、交通、大に便あり。

此の郡には、有名なる寺多し。山科村に、山科別院、眞醍醐村に、勸修寺、天台隨心院、眞言上醍醐寺、眞言下醍醐寺、眞言醍醐寺、眞言三寶院、眞言宇治村に、萬福寺、黄檗等あり。山科別院は、二つあり。東西兩本願寺に属せり。上醍醐寺は、醍醐山の上にありて、西國十一番の札所なり。三寶院には、寶物多く、かつ、秀吉公の、伏見城にありしとき、常に來り

遊びし寺なれば、其の名高し。萬福寺は、世に、黄檗と稱す。黄檗宗にして、支那明國の僧隱元、我が朝に來りて建てし寺にて、堂塔、すべて支那風なり。

萬福寺の南に、陸軍省宇治火藥庫及同製造所あり。其れより南半里に、宇治町あれど、そは、久世郡に屬せり。此の郡にて、有名なる産物は、茶とす。

久世郡

久世郡は、紀伊郡の南にあり。巨椋池、其の中央にありて、池の西に、淀町、東に、宇治町あり。淀町は、淀城のありし處にして、城内に、水を入るゝために設けたりし、水車は、世に名高けれど、今はなし。

宇治町は、宇治川の東西に跨りて、川には、宇治橋を架せり、名所多し。川の東には、興聖寺、曹洞離宮八幡宮あり。西には、平等院、浄土縣神社あり。平等院の本堂鳳凰堂は、鳥の翼をはれる形に似たり。今より八

百年前の建物にして、美術家の稱賛して、摸範とせる所あり。明治二十五年、アメリカ、シカゴ博覽會に、此の堂と等しきものを建築して、外國人を驚かし、ことあり。

縣神社は小祠なれど、毎年六月五日には、有名なる縣祭あり。見物の人々、宇治堤を行きかふものと、舟中のものと、互に競争して、甚賑はし。

宇治町は、源平の頃、名高き戦争のありし處なり。高倉天皇の承治四年、源賴政、以仁王を奉じ、平氏を滅さんとして、兵を擧げ、敗れて、平等院に退き、川を隔て、平知盛、平重衡と戦ひしが、軍終に利あらず、賴政は、扇の芝に自殺し、王は、南に逃れ、相樂郡柵倉村にて、矢に中りて薨じ給ひき。後、四年を経て、後鳥羽天皇の元暦元年、木曾義仲、京にありしが、源義經、之をせめんとて、兵二萬五千を率ゐ、伊賀より、リ治に來

り、川の西に陣しぬ。義仲は、兵を、川の東に出だし、橋板をとりはづして、之をふせぎつ。此の時、義經方より、佐々木高綱、梶原景季の二人、まづ、馬を、水中に入れて渡りしが、高綱先陣し、畠山重忠等の將士、ついで、河中に飛び入りて渡り、義仲の兵と戦ひて、大に、之を敗りし事あり。

宇治町は、古戰場として名高きのみならず、風景、頗よく、瀧車通じてより、遊人、一層多し。茶は、特に、此の地の名産にて、茶を、宇治とよぶに至れり。

綴喜郡
相樂郡

綴喜、相樂の二郡は、山城南部の大郡にて、東半郡は、いづれも、山多し。鷲峰山は、二郡の界に聳ぬ、頂上には、金胎寺といふ寺あり、鷲峰山の南なる木津川のはとりに、笠置山あり。大石多し。元弘の乱に、後醍醐天皇、此の山に行幸し給ひて、楠正成公を、河内より召し給ひし事あり。

り。後、賊の北條に攻められ給ひて、山を落ちさせ給ふ時、詠じ給ひし
さして行く笠置の山をいてしより

天の下にはあくれかもなし

の御歌は、人の、よく知れる所にして、聞くも勿體なきことなり。

綴喜郡の男山には、官幣大社八幡宮あり。應神天皇、神功皇后、比咩大
神を奉祀せり。源氏の氏神なり。毎年九月十五日、朝廷より行はせら
るゝ放生會の大祭は、賀茂の葵祭の如く、行列、甚麗し。また、此の社へ
は、毎年一月十五日より四日間、疫除詣として參詣する者多し。

綴喜相樂二郡の産物は、木綿織、茶、甘藷等なり。

右にて、山城八郡の地理、歴史の大要を志し終れり。市にも、郡にも、
猶おき上ぐべきこと、數多あれど、其れらの詳しきこと、他の諸國
の地理、歴史とは、更に、書物をかへて學ぶ所あるし。

京都誌要終

明治廿九年五月十六日印刷
明治廿九年五月二十日發行

定價金拾五錢

版權所有

編輯者 京都府愛宕郡上加茂村
二百四十九番戶
山本顯造

發行者 京都市上京區寺町通三條上ル
二十二番戶
清水幾之助

印刷者 京都市上京區御幸町二條上ル
平安印刷商會
村田三男三

發行所 京都市寺町通三條上ル
清水正文堂

